

# 僕の父

新見市立哲西中学校

二年 森 優 稀

僕の父は、家族全員で一緒に過ごす時間が少ない。なぜなら父の仕事は勤務時間が不規則だからだ。父の仕事は介護福祉士である。

早番の日は、僕が寝ている朝の五時には仕事へ行き、遅番の日は寝ている夜中の十一時頃に帰ってくる。夜勤の日はシフトによつては、二日ほど顔を見ない日もある。

そんな父とのすれ違いの日々で、僕はもつと父と話す時間が欲しいと思った。たまにする父の仕事についての話や、趣味の話をするのがとても好きだった。そんな時間をもつと欲しいと思っていた。

そんなある日、父と二人で野球の練習試合に行った。午前で終わったので、帰りに妹と母と合流し、久しぶりに家族で出かけないかと父から提案された。そのとき、野球の練習終わりで疲れていて足が痛かったこともあり、父の遊びに行くという提案に、

「足が痛いから行きたくない。」  
と反対した。ただ、父に押し切られるように結局ついて行くことになった。「疲れた」「足が痛い」「歩きたくない」「家

に帰りたい」そんな思いでいっぱいだった。ご飯を食べるかと聞かれても「いらない」買い物に行くかと言われても「めんどくさい」と言い続けていた。結局、思いのほか早く帰宅することになった。足は本当に痛かったので、ほつとして家に着いた。

翌日、母から部屋に呼ばれ、

「昨日遊びに行った場所は、ずっとお父さんが家族全員で遊びに行きたいと言っていた場所だったのよ。足が痛いのはわかるよ。でもお父さんの気持ちちゃんと考えてた？」  
と言われはつとした。なかなか時間が取れず、休みが合わない中で、父も疲れているのに誘ってくれていたことに僕は気づかなかつた。どうしてあんなことを言ってしまったのだろうともものすごく後悔した。話がしたいと思っていたのも、足が痛いといっていたのも全部自分のことしか考えていなかった。父の気持ちは何一つ考えていなかったことに気づいた。時間がなく会えない悲しみは、父も同じだったのに。そんな自分が嫌になった。

ただ何度思い返しても、あの日の父は遊んでいるときも家に帰った後も、僕を責めることなくいつもどおり優しく接してくれていた。父の心の大きさを肌で感じた気がした。それから僕は、反省してできるだけ家族のみんなの気持ちに寄り添うことを心がけることにした。嫌だなと思う気持ちをおさえ、父や母に

「一緒に行こうやー。」

と声をかけられたら、本当は中学生になって母と出かけるのは少し恥ずかしいけど、なるべく断らないようにしている。限られた時間の中で前のようなことはしないように心がけているからだ。父とともにどこかに出かけるような予定は、今はなかなかないけれど、日ごろのちよつとしたことでも相手を思いやることを意識することを学んだ。

この夏、僕は少し父に近づけただろうか。そんな話をまた父としたい。